
食人館《しょくじんかん》

カワニシ美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しょくじんかん
食人館

【Nコード】

N4636Z

【作者名】

カワニシ美玲

【あらすじ】

大学生活最後の思い出にと、真下秋宏は恋人の涼花を含む五人で山にピクニックに出かけた。しかし山に向かう途中の森林で道に迷ってしまい、やっとの思いで森林を抜け出すとそこには古びた館が……。
好奇心に誘われ館の中に入った六人を待っていたのは、人肉を喰らう化け物だった。

プロローグ（前書き）

これは一部ホラーや残酷な要素が含まれていますので、そういった類の苦手な方は観賞をお控えください。

ブローグ

『ここに迷い込んでからもう何年の年月が過ぎ去ったのだらう。疲労や食糧不足で身体は限界のようです。誰か助けてください。またあいつが来る。』

あいつにまた見つかったら、僕は今度こそ死を覚悟しなければなりません。

だからお願いです。誰でもいいんです、早く助けてください。僕をここから出し――』

これは、とある廃墟^{はいきょ}になった館から発見された置き手紙。手紙の内容はここで途切れていて、続きを発見することはついに出来なかったという。

ただ唯一、この置き手紙の最後の一文と思しき切れ端だけは発見できている。しかし所々に染みのようなものが付着し、その一文から解読できた言葉は以下の通りである。

『――さ――なら――涼花――――てる。――秋宏』

絶望の予兆

晴天。今日の空模様を一言で表すのなら、それが一番合っているだろう。

海よりもさらに広大に見える青空。雲も景気よくあちこちを浮遊^{ふゆう}している。

そんな何気ない日常にさえ、今日の真下秋宏^{ましもおきひろ}は目がいつてしまう。なんといいっても今日は、僕の大学生活最後の一日なのだ。それを祝福するかのような天候に詳しい目がいつてしまうのも、必然といえは必然である。

それに、今日の僕はある人に大事なことを伝えなければいけない。受け入れてくれるか、多少の不安はあるものの言ってみなければ結果は誰にも分からない。

要するに、当たって砕けろといったところだ。

「秋ちゃん！」

と、不意に後ろから声をかけられた。同時に締めまりなく開いていた口元が、きゅっと引き締まる。そして後ろに振り向くと一人の女性が立っていた。名前は神戸涼花^{かんべりようか}、この大学を受験した時に知り合った彼女は今では友達ではなく、恋人として僕と付き合っている。

艶^{つや}のあるサラサラとした長い黒髪に、小顔でどこかおっとりした顔立ち。身長は百七十センチと、女性にしては背が高くモデルのような綺麗なプロポーションを保っている。

そんな彼女が、地味でこれといった長所もない僕なんかと付き合っているというのは、些^{いさ}かな疑問でもある。

「秋ちゃんどうしたの？ 話があるって何？」

涼花が穏やかな優しい声で僕に問いかけてくる。

「いや、ええっと……。その、ね」

緊張からか、少々口ごもってしまう。それでも秋宏は意を決して少しずつ話し始めた。

「今日でさ、大学生活も終わりだね」

「そうだね〜。……友達とも会う機会が少なくなるし、寂しくなっちゃうね」

涼花はそう言いながら、心底残念そうな顔を僕に向けてくる。

「うん……。それで、さあ……僕達も大学終わったら会える機会が少なくなるかもしれないじゃん？」

「うーん、確かに……。私、秋ちゃんとなかなか会えなくなるのは嫌だな」

「それで、なんだけどさあ……」

秋宏はそこで一旦話すのをや

め、目を閉じる。そして頭に疑問符を浮かべ次の言葉を待つ涼花に、緊張した面持ちでこう告げた。

「……僕達、結婚しないか？」

「……………え？」

予想していた通りの、長々とした沈黙。しばらくの間、お互いの言動が強制的に一時停止される。

そして、先に沈黙を破ったのは涼花の方だった。

「……………うん」

消え入りそうな声だったが、涼花は確かにそう言った。ということ
はつまり……、

「……オッケー？」

涼花は二度同じことは言わず、ただ黙って微笑んだ。途端に秋宏の
両足から力が抜け、秋宏は地面に膝から崩れ落ちる。

「あ、ちよつと秋ちゃん！？ 大丈夫？」

地面に倒れた僕に、涼花が心配そうに駆け寄る。

「大丈夫、返事聞いて安心したら腰が抜けちゃって」

そうはにかみながら答える。すると涼花は、

「もう、……秋ちゃんの馬鹿」

そう言ってから静かに微笑み、僕の頬に優しくキスをした。

「お、いたいた。真下ー」

するとそんな二人のいい雰囲気などお構いなしに、遠方から自分を呼ぶ慣れ親しんだ声が耳に届く。

「あゝっ悪い、取り込み中だったか？」

そう言いながら僕ら二人に話しかけてきたのは、一人の大柄な男だった。

身長、百八十センチ。角刈りにされた髪型に加え目付きが悪く、傍^は目^{ため}から見たらヤクザに誤解され兼ねないこの男の名は松村大輝^{まつむらたいき}といい、涼花と同じく大学で知り合った僕の男友達の一人である。

「大丈夫だよ。で、何？」

両足が機能してきたので、地面から立ち上がりながら横目で松村に返答^{つなか}を促す。

「ああ、そうそう。ほら今日で大学も終わりだろ？ だから最後にみんなで集まって、思い出作^{しゅつさく}ないかなゝって……どう？」

「思い出作りか……。涼花、どうする？」

涼花に言葉を伝達すると、涼花は普段通りの穏やかな声で、「いいんじゃないかな？ みんなで思い出作^{しゅつさく}ろうよ！」と答えたので僕も思い出作りに参加することに決めた。

松村が言うにはもう案は決まっていて、僕らの大学からちようど東に見える山にピクニックに行くとのことだった。尚^{なほ}、山に着くまでの移動手段は車で、松村の親友であり僕の友達でもある柴村浩太^{しばむらこうた}が来て運転することになっている。

その他にも、涼花の友達である白川真奈美^{しらかわまなみ}さんや佐々川香苗^{ささがわかなえ}さん。さらには佐々川さんの双子の兄で、僕の友達の佐々川直人^{ささがわなおと}も来てくれるらしい。

みんな大学生活最後とあって、派手に遊んでやろうという気持ちでいっぱいらしい。

「あいよ。じゃあ、二時間後にここに集合してればいいんだな？」

松村から受け取った伝言を、再確認のためもう一度聞く。松村は「ああ」とだけ言^{つなず}って頷き、不都合があつたら電話してくれと言ってその場を去っていった。

すると、今まで僕の隣で黙って話を聞いていた涼花が口を開いた。

「ふふ、楽しみだねー。みんなで大学の最後の思い出いっぱい作る
うね、秋ちゃん」

と笑顔で僕に言う。僕はその満面の笑みを浮かべる涼花に、

「うん、そうだね。」

と言い、ピクニックの準備のため「じゃあ二時間後にね」と僕らも
その場を離れた。

絶望の序章

そして二時間後、僕は山に行く準備を整えて集合場所に着いた。まだ涼花も松村の姿もなく、どうやら僕が一番乗りのようだ。

「あ、真下さん。早いですね」

と思っていると、どうやら僕よりも前に来ていた人がいたらしい。視界に一人の女性が映る。

「ああ、どうも白川さん。そっちも随分早いね」

「何言ってるんですか。今日は大学生活最後の一日なんですよ！ 気合入れていかないと！」

そう言って白川さんはグツと拳を握る。この男勝りの性格である白川さんは、涼花の高校時代からの友人である。僕も涼花と付き合い始めてから、白川さんと話すようになり今では女友達の一人となっている。

ちなみに身長は百七十二センチと僕より一センチ大きい。髪の毛も短く、遠目に見ると本当に男にも見えてくる。

「そうだね、最後ですもんね。……他の人はまだ来てないんですか？」

白川さんにそう尋ねると、「さっき電話で香苗がもうすぐ来るって言っていましたよ」という返事が返ってきた。それから二人で待つことと約十分、集合場所に向かって遠くから佐々川兄妹が歩いてきた。佐々川香苗が僕らの姿を確認すると、ぶんぶんと手を振ってくる。そんな妹のすぐ隣を歩いている兄の佐々川直人も、こちらに軽く手を上げて挨拶をしてきた。

「真奈美、早いね。私達が一番乗りだと思ってたのに」

「ふふゝん。まだまだ甘いわね、香苗」

白川と香苗の二人が痴話を始め出し、直人の方も鞆から本を取り出して、それを黙々と読み始めた。

この兄妹の兄である直人は、物静かで暇さえあれば基本的に読書を

している文学少年だ。地味なところは自分と似ているのだが、顔がものすごく美形で女性によくモテているのが僕とは違うところだ。妹の香苗も兄によく似た美形な顔立ちで、きつと涼花と出会っていないければ僕も好きになっていたんじゃないだろうかと思う。

そんな二人が来てから五分後に松村が到着し、涼花もそれからすぐに集合場所に姿を見せた。

「それじゃあ、柴村の車が駐車してあるところまで行くぞー」

松村の掛け声に、その場にいる全員が移動を開始する。柴村の車は、集合場所から約百メートル離れた場所に駐車されていた。

「お、みんな来たね。待ってたよ」

駐車場で一人待っていた柴村は、集合した全員の人数を確認すると車のエンジンをかける。

柴村浩太は松村ほどではないが身長が高く百七十八センチもあり、オールバックにされた髪型と両耳についているピアスが印象的な男である。

ちなみに身長順に並ぶと、僕はこの男子の中の面子めんつでは一番背が低い。涼花も女性人の中では下から二番目だ。そんなことを考えていると、

「……よし。じゃあ、そろそろ出発するか」

と車の中にみんなの手荷物を詰め終えた柴村が宣言したので、一行は最後の思い出作りのために車に乗り込む。そして運転席に柴村が乗り、六人を乗せた車は山に向かい走り出した。

それから山に着くまでの間、自分は涼花とお喋りをしたり直人に本を借りたりして時間を潰していた。車は大学の駐車場を出てから約一時間で、目的地である山の手前までやってきた。柴村はそこで一旦車を止め、「どっちから行く？」と前方を指差しながら僕らに問いかけてきた。

前に視線を向けると、右折方向みぎせつには一般的な道路が続いていて、山が見える左折方向ひだりせつには森林が生え道なき道が続いている。

「一応どっちからでも行けると思うんだけど……」

柴村が困った顔をしてみんなの意見を待っていると、

「左折してみれば？ そっちの方がちょっと山に近そうだし、なんか面白そうじゃん？」

という白川の意見で、六人を乗せた車は山に近い森林が生い茂る^{しげ}左折方向に走り出した。

それから道なき道を走ること約三十分。僕達は案の定、森林の中を彷徨^{さまよ}っていた。

来た道も判断がつかず、気がつけば前後左右どこを見ても森が続いていた。

「……大丈夫かな？ 秋ちゃん」

周囲の景色を見ながら、涼花が心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫。……きつと抜け出せるって」

そうは言うものの、秋宏自身にも多少の不安はある。車はさらに森林の奥に向かうが、抜け出せる気配はない。携帯も圏外になっていて、電話で助けを求めることも不可能になってしまっている。すると白川がしゅんとした顔で、

「すいません……。私が馬鹿なこと言わなければ……」

と落ち込んでしまう。それを香苗や松村が「大丈夫大丈夫！」と励^{はげ}ます。

すると今まで黙って本を読んでいた直人が、口を開いた。

「とりあえず、車を降りて歩

いてみないか？」

「……車はどうすんだよ？」

柴村が口を挟むと直人は静かに、

「この際、車は仕方ないだろう……。今はこの森を出ることを第一に考えないと」

「マジかよ。結構高かったんだぜ？ ……この車」

柴村は少々悩んだ後、ため息をつきながら車を止めた。そして運転席から外に出る。

「まあ、事前に俺が山に行く道調べなかったのが悪いからな……」。

みんな降りるぞ」

柴村が言つて、直人から順に五人は車から外に出た。そこまではいいのだが問題はここからである。

「で、これからどうするんだ？ 直人」

僕が問いかけると、直人は辺りを軽く見渡してから顎に手をやる。それから数十秒ほど考える仕草をした後、「こつちの車じゃ通れない道を行ってみよう。もしかしたら、見晴らしのいい所に出るかもしれない」と森の中に歩いていく。取り残された五人は顔を見合わせ、他に当てもないことから直人の案に賛成することにした。

「一か八かだ。……行くぞみんな！」

松村の言葉と共に、五人も直人の後に続き森の中に入っていった。道なき道から、さらに道なき道へと六人は突き進む。歩き始めてからもう一時間は経ったが、一向に見晴らしのいい所に出る気配はない。さらに日が暮れてきて、急がなければ夜になってしまう。

「やばいぜ……。どうするよ？ 直人」

「……ここまで来てしまったんだ。歩くしかないだろう」

「おいおい、野宿だけはごめんだからな？」

そんな会話をしている時だった。涼花が「あっ！」という声を上げた。全員の視線が涼花に向けられる。

「あれ、……家じゃない？」

と、目を細めて遠くを見つめる。秋宏も涼花の見つめる方向に視線をやると、遠方に大きな家のようなものが見える。

「こんな森の奥に、……家？」

「行ってみよう」

松村が家らしきものが建っている場所に向かって歩き出したので、五人も続く。そして、だんだんと家のようなものの正体が分かってきた。

「……なんかの屋敷っぽいな。なんだってこんなところに？」

柴村が驚愕した顔で呟く。そう、涼花が見つけた家のようなものの正体は、何年も前に廃墟になったと思われる大きな屋敷だった。

「どうする？ 入ってみるか？」

松村が言つと、少し元気を取り戻した白川が口を開く。

「野宿よりはまだマシだし。私は入ろうと思うけど、……みんなは？」

「……もう日も沈む。他に選択肢なんかないよ」

直人が空模様を確認しながら、冷静に判断する。他の全員も森で野宿するくらいならと、松村の意見に賛成した。

「……なんかごめんな、涼花。こんなことに巻き込んだじゃって」

涼花に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、秋宏は頭を下げる。それに対して涼花は首を静かに横に振った。それから穏やかに微笑んで、

「うつん。……秋ちゃんのせいでも、誰のせいでもないよ。それに私は秋ちゃんさえいれば、どんなことが起こっても全然大丈夫だから！」と言つて僕を励ましてくれた。

「じゃあ決まりだな。行くぞ」

松村が屋敷の玄関と思われる扉の前まで歩き、扉のドアノブに手を掛ける。そして一度躊躇いを見せた後、松村は一息にドアノブを回した。ギチツという鈍い音が響き、扉が開く。

屋敷の中は外見の古びた感じとは異なり、綺麗で洋風な雰囲気が漂っている。まるで、まだ誰かが住んでいるかのよう……。

「……誰か住んでるんじゃないの？ まずくない？」

香苗が不安を隠し切れていない声音で、誰に問うでもなく呟く。その呟きに直人が応答する。

「いや、むしろ誰かが住んでた方が都合がいい。この森の抜け道を知ることが出来るかもしれない」

「ああ確かに！……そんじゃあ、お邪魔させてもらうか」

柴村はそう言つと、屋敷の中に入つていつてしまふ。松村もそれに続いて、「まあ何かあつたらすぐに出ればいいだろ？」と中に入る。白川と香苗もそれに続いた。

「入ろう真下君。大丈夫、きっと何とかなるよ」

直人がまだ判断に迷っている僕と涼花を後押しするように、そう告げて中に入っていく。

「……そうだな。よし、行こう涼花！」

「うん。秋ちゃん」

直人の後押しもあり、二人も屋敷の中へ入ることに決めた。まず涼花が先に中に入り、まだ屋敷の外に立っている僕に手招きする。それで僕も意を決し、屋敷の中へと入った。

「意外と広い屋敷だね。秋ちゃん」

涼花が屋敷の中を見回し、素直な感想を述べる。確かに広い屋敷で外から見た感じで、だいたい三階建てだろうと推測する。

「そうだね。他のみんなは？」

屋敷の中を軽く見渡した後、他の四人がどこにいったか涼花に尋ねる。すると屋敷の入り口から一番近い部屋の扉が開き、他の四人が顔を出した。

「おい。こつちだ」

松村がそう言うて部屋の中に引ッ込んだので、秋宏と涼花も四人のいる部屋に向かい歩き出す。とそこで秋宏は屋敷の扉を閉め忘れたことに気付き、扉を閉めに戻る。

扉の前まで歩み寄ると案の定扉は開いていたので、秋宏はドアに手を伸ばし――

――ボタン。

――

「……あれ？」

風でも吹いたのか扉はひとりでに閉まった。

「どうしたの？ 秋ちゃん」

「ん。……いや、何でもない」

秋宏は訝しげに扉を見つめた後、すぐに気を取り直し五人の集合している部屋に歩きだした。

……まさかこの一時間後に悲劇が待っているとは知らずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4636z/>

食人館《しょくじんかん》

2011年12月17日21時54分発行